HALF TIME

連載

# FACE TO FACE

## Dr. N. Furuyama

## ドクター古山のルックスアップ講座

自由が丘クリニックが掲げる「BONSAI AESTHETIC」は海外マーケットを視野に入れたキーワードで、その認知度は急速に高まった。古山さんはさらに、「年齢を重ねても魅力的でありたい」と願う男性に向けたメッセージ発信も準備を進めている。今回は、その経緯について聞いてみた。

古山登隆
（ふるやまのぶたか）
日本の美容医療をリードするパイオニア的存在。メスを使わないノンサージェリー施術を得意とし、ボトックスやヒアルロン酸注入、糸によるたるみの治療など、世界トップクラスとして高く評価されており、注入指導医のヘッド・ファカルティとして国内外の美容医療の発展に貢献している

## BONSAIのつぎは、男性をターゲットにSAMURAIをテーマに掲げる予定です。

### 美的センス編

海外の学会で講演やプレゼンテーションを数多くこなし、日本独自の美容医療を世界に発信しているドクター古山。日本と海外の「ビューティー」の差をどのように感じているのだろうか。

「それはすごく興味のあるテーマですね。個人的には、日本人が生み出す『美』の根幹にあるのは、センスと感謝の気持ちではないか、と思っています。次の世代を背負って立つ子供たちにも、そのセンスと感謝の気持ちをしっかり教えていく必要があるでしょうね。センスを磨くために重要なのは、『気』と『間』（ま）と『五感』だと考えています。『気』は、気配、ムード、オーラと言い換えてもいいかもしれません。目には見えないけれど、確かにそこから発している、第三者が感じ取れる雰囲気です。『間』は、距離感やタイミングの取り方。『五感』は、文字通り、視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚で、『気』や『間』を感じ取るためのセンサーです。日本では伝統的に子供は質素な生活習慣でしつけた方がよいと思われがちですが、私はその逆ではないかと思います。子供の頃から良いもの、上質なものにふれる機会が多いほど、ものの本質的な美しさが理解できるようになりますし、『気』『間』『五感』は明らかに磨かれるはずです。朝から高カロリーで味が濃いものを食べるとか、好き勝手に贅沢をさせるという意味ではありません。上質なものは何が違うのか、自分の体を通して本質的な美を学習する、という意味です。自分を振り返ると、子供の頃から絵を描くことが好きでしたし、視覚から入る情報に敏感に反応していました。良いものを見る、という環境に恵まれていたのだと思います。美容医療を目指すようになって、恩師である塩谷信幸先生から徹底的にデッサンの訓練を課せられたことも、人間のフェイスラインの微妙な変化に気づく観察眼につながりました」

実際に古山先生のノンサージェリーの施術を受けた経験から、編集部の猶岡は、「自分の顔の短所をなくすというより、長所を伸ばしてくれた」という印象が強く、そこにドクター古山のセンスを感じた。しかしドクター古山の話を聞くと、「短所をなくしながら長所を伸ばす」というほうが正解ではないかと思えてくる。

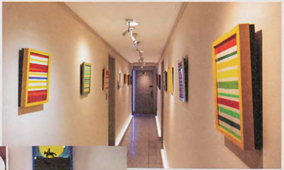
「美容医療の考え方としては、短所をなくすことと長所を伸ばすことは表裏一体です。単純化してお話しすると、再建外科は事故やケガで損傷した部分を作り直す医療、マイナスの状態からゼロの状態まで戻す医療です。それに対して美容外科は、日常生活に支障はないけれど、もう少し目を大きくしたいとか鼻を高くしたいとか、ゼロの状態からプラスにしていく医療です。じつは両者のベクトルは同じです。老化によって衰えた容姿を若返らせるという考え方は再建外科的思考で、そこからさらに魅力的な美しさを目指すのは美容外科的思考。目指している方向性は同じなのです。二段階の作業がひとつの流れになっている、と考えればご理解いただけるかもしれません。ただ、どの状態をゼロと捉え、どの状態をゴールとするかは、その医師の美的センスにかかってきます」

盆栽は日本文化の象徴のひとつとして海外にも数多くの愛好家がいる。自由が丘クリニックは日本的女性美を表現するコンセプトとしてBONSAI AESTHETICを打ち出し、実際に院内にも立派な盆栽がレイアウトされている

自由が丘クリニックが近年打ち出している"BONSAI AESTHETIC"は、作り過ぎない、過度に自己主張し過ぎない、日本人らしいナチュラルな美しさをテーマに掲げている。

「おかげさまで海外の専門家からも高く評価されるようになりました。現在は、BONSAIにつづく次のコンセプトとして、SAMURAIを考えているんですよ。ターゲットは男性です」

世の中には、もっと自分を磨きたい、いつまでもカッコいい男でありたいと願うダッズは数多くいる。しかし、そんなダッズに対する情報は圧倒的に不足している。「以前、御誌の小野里編集長と対談した際に、編集長が『筋肉は何歳になっても鍛えられるけれど、顔は鍛えられないんです』とおっしゃっていたことが強く印象に残っています。あれから数年が経過し、ノウハウもエビデンスも積み上げられたいま、筋肉と同じように顔も鍛えられることをちゃんと伝え、そのプログラムを体系化したいと思うようになりました。それを象徴するキーワードとしてSAMURAIが最適だと思ったわけです。西洋の騎士のような勇敢さだけでなく、身だしなみや品格、ある佇まいも備えた日本的な美しさを一言で伝えられる魅力的な言葉だと思いました。そしていかに孤高な人生を楽しめるのかも、50歳を過ぎ、60歳を過ぎた我々の世代には大きなテーマですね。SAMURAIを通してヘイルメリーマガジンと新たな接点があればうれしいかぎりです」。



自由が丘クリニックの院内には、エントランスから廊下、待合室から診療室まで、色とりどりのアートがドクター古山のディレクションによって飾られている。←今回インタビューした部屋には、ドクター古山自身が描いた絵画がズラリ並ぶ。色彩感覚もタッチもすべて独学で学んだという。センスの良さは絵にも表れている

SAMURAIというキーワードには、ドクター古山自身のライフスタイルが反映している。「自分に何の刺激も与えず、お酒も飲まずに寝ると、たしかにぐっすり何時間でも寝られます。朝の目覚めもいい。でも、ちょっと待てと私は思うんです。ぐっすり寝ている自分が、縁側で日向ぼっこしながら寝ている老犬のイメージと重なって、恐怖にかられるわけです。それはSAMURAIの人生なのか？とね」







取材協力：自由が丘クリニック tel. 0800・808・8200 https://jiyugaokaclinic.com/